

奈文研

ニュース

No.68

Mar.2018

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 奈良文化財研究所
奈良文化財研究所
〒790-8577 奈良県生駒郡24丁目
http://www.nabunken.go.jp

奈良文化財研究所 平城宮跡解説ボランティアが新体制で活動を開始

奈良文化財研究所 平城宮跡解説ボランティアは、奈文研の調査研究の成果にもとづいた解説を通じて、来訪者の方々に奈良時代の遺構が保存されてきた平城宮跡の大切さ、素晴らしさを伝え、奈文研の調査研究成果の理解を深めて、楽しんでいただくことを目的とし、平城宮跡資料館、文化庁の公開施設（第一次大極殿、朱雀門、遺構展示館、東院庭園）の定点における解説案内およびツアーガイドをおこなっています。

この解説ボランティア制度は、1999年から実施していますが、来訪者への対応をさらに充実させるために、所内で議論を重ね、①グループ制・リーダー制の導入、②基礎研修の内容充実と定期的な勉強会の開催、③奈文研と解説ボランティアが意見交換をする連絡会議の設置等を盛り込んだ新制度を策定し、2017年8月に募集をおこないました。その結果、奈良市以外の遠方の方も含む多数の応募があり、選考と基礎研修の受講を経て、174名を登録しました。

今回の基礎研修では、研究員の講義および、各定点の解説案内に即した実地研修、外部講師による来

訪者対応の接遇の講義等も実施するほか、解説ボランティア活動の心得等をまとめたハンドブックを作成・配布しました。また、新たな試みとして、奈文研と解説ボランティアの交流会や解説ボランティアに向けた平城宮跡東院地区の発掘調査の現地説明会を開催しました。

2018年1月からこの新たな制度と体制のもとで活動を開始しました。3月24日には平城宮跡歴史公園の開園にともない、朱雀門ひろばの東側に国土交通省の平城宮いざない館が開館しましたが、同館の詳覧ゾーンでは平城宮跡から出土した遺物等が展示されていますので、新たに解説ボランティアの定点に加えて、解説案内を始めています。

解説ボランティアは多様な来訪者の方々に応じた解説案内をおこなっていますので、この解説案内を通じて、来訪者の方々に奈良時代に思いを馳せながら楽しい一時を過ごしていただければと思います。

解説ボランティアは、原則、月曜日（月曜日が祝日の場合は翌平日）および年末年始（12月29日から1月3日）を除いて9時から16時半に解説案内をおこなっています。ぜひ平城宮跡へお越しいただき、ボランティアの解説を聞いてみて下さい。

（研究支援推進部 津田 保行）



実地研修の様子



第一次大極殿での活動

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院東北隅部の調査(飛鳥藤原第195次)

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院や朝堂院で継続的に発掘調査をしています。本年度は、大極殿院東北隅の正確な位置と回廊の規模や構造の解明を目的とし、大極殿院東北隅部の東面回廊および北面回廊の接続部を調査しています。調査は、2017年10月4日から開始し、現在も継続中です。まだ調査は途中段階ですが、ここでは現時点での成果の一部を紹介したいと思います。

調査区は、醍醐池の南を東西に走る道路のすぐ南に位置します。ここは、かつて橿原市立鴨公かものみやこ小学校があった場所で、国史跡指定にともない、1974年に小学校は藤原宮跡の西部に移転しています。小学校が建設される以前は、田畑として使用されていたようで、小学校建設時の盛土の下には分厚い水田の床土が残っていました。

この床土を掘り下げると、ほぼ想定位置で大極殿院の東面回廊と北面回廊の遺構を確認することができました。北面回廊部分はほとんど削平されてしまい、礎石を固定するために入れられる拳大の根石がわずかに確認できる状態でした。いっぽう、東面回廊は基壇の高まりが残り、礎石の抜き穴と、礎石を包むように据えられた根石が検出されました。柱を立てるために、基礎の部分をしっかり和構築していたことがよくわかります。

東面回廊の基壇は、東西とも基壇縁が大きく削られ、基壇外装や雨落溝は確認できませんでしたが、遺構の上面を多量の瓦片が覆っていました。この瓦

片は、藤原宮期の瓦で、本来回廊に葺かれていた瓦が藤原宮廃絶後に投棄されたものだと思います。瓦堆積は、東面回廊の上面とその両端の傾斜部分に多く確認され、北面回廊や東面回廊から西側ではほとんどありませんでした。西側から続く東西方向の耕作溝が、東面回廊の基壇端に掘られた南北方向の耕作溝に合流していることを合わせて考えると、藤原宮は廃絶後に田畑へと転換していたものの、東面回廊の部分は里道もしくは幅の広い畦道として残っていたと考えることができます。多量の瓦片は、この里道の上面や法面部分を補強するために敷かれたのかもしれない。

その後、基壇土上面の瓦堆積も耕作溝によって破壊されていますので、東面回廊部分も耕地化したと思われるのですが、その中には、礎石位置を避けるように迂回する溝がありました。おそらく、その溝が掘られた時期、つまり東面回廊が耕地化した平安時代から中世には、まだ礎石は残っていたのでしょう。

礎石がいつ、どの段階で抜き取られたのかはわかりません。しかし、鴨公小学校建設後の1934年、日本古文化研究所によって大極殿院の発掘調査がおこなわれた際にはすでに抜き取られていました。このように、藤原宮の遺構が、少しずつ失われていく様子を発掘調査から知ることができました。

今回の調査は、2018年3月に終了予定です。今後、回廊の遺構を確定するべく、その構造と細部について綿密な調査をおこないます。調査の後半戦では、藤原宮の造営と、さらにそれ以前の様相について調査し、この土地の使われ方の「歴史」をあきらかにしていきたいと思います。

(都城発掘調査部 大林 潤)



瓦堆積検出状況(南東から)



東面回廊周辺に残る瓦堆積(北東から)

平城宮東院地区の調査(平城第593次)

平城宮は約1km四方の東側に東西約250m、南北約750mの張出部があり、その南半約350mの範囲を東院地区とよんでいます。東院地区では、『続日本紀』等の文献から、皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られています。

2006年度から、東院地区西辺部の重点的な発掘調査を継続しており、今回の調査では、西辺部から中枢部にかけての遺構の様相を引き続きあきらかにすることを目的として、第584次調査区の北に調査区を設定しました。調査面積は969㎡で、2017年10月2日に調査を開始し、2018年1月31日に終了しました。

今回の調査では大きく2つの成果が目立ってきます。まず、奈良時代前半の大型獨立柱建物を検出しました。この建物は東西9間以上の東西棟建物で、床張りの構造であったとみられます。柱筋の検討からは、昨年の南隣の調査区(第584次調査)で検出した南北10間×東西2間の南北棟建物と一連の空間を構成していたとみられます。建物は調査区外東方へ続いており、今後の調査によって全貌があきらかになることでしょう。

2つ目は、奈良時代後半の大規模な井戸とこれから派生する溝と建物を検出しました。井戸は周囲に石組溝が付属する大規模なもので、東西約9.5m×南北約9.0mの範囲を方形に深さ約0.3m掘り込み、その中心に東西約4.0m×南北約4.0mの平面方形の井戸枠の掘方を設けています。これは平城宮内では内裏地区でみつかっている井戸に匹敵する宮内最大級の規模です。

また、井戸からは東西方向の溝が派生しており、



調査区全景(北西から)

この東西溝がさらに2本の溝に分岐し調査区外西方へと続いています。この2本の溝は建物内に引き込まれていることから、井戸からの水を建物内で利用していた様子がうかがえます。

これらの溝は廃絶時に多くの土器とともに埋め戻されており、その内容をもとに食器類に加えて須恵器の甕や盤、土師器の甕やカマド等の貯蔵具・調理具が目立つ点が注目されます。

これらの遺構の状況と出土遺物の内容からみて、今回検出した井戸や溝は、奈良時代後半の東院中枢部の食膳の準備に関連する遺構とみられます。奈良時代後半の東院地区では天皇と五位以上の貴族らが宴を催したことが知られており、これらの宴における食事を支えた空間の一端があきらかになったと考えられます。これらの成果は、東院地区全体の空間利用の実態を解明する上で重要な手がかりです。

なお、12月23日には現地説明会を開催しました。冷たい風が吹く中、823名の方々にお越しいただき、平城宮跡の発掘調査成果に対する関心の大きさを実感しました。また、私たちが今回の調査成果の説明に加えて、土や出土遺物を慎重に観察しながら掘り進める発掘調査の楽しさ・面白さを感じていただくために、説明会中に実際に井戸を掘り下げる作業をおこなう「ライブ発掘」という企画を試みました。これからも私たちが日々取り組んでいる発掘調査や研究の成果をわかりやすく紹介して、より一層平城宮跡の重要性をご理解いただける努力を続けたいと思います。

東院地区の調査はこれからも続きますので、今後の調査の進展にどうぞご期待ください。

(都城発掘調査部 小田 裕樹)



現地説明会の様子(南東から)

瓦の3次元計測

2つの瓦はいずれも平城京の薬師寺から出土した創建時(8世紀初頭)の軒丸瓦です。一見まったく異なる文様にみえますが、実は同じ型で作られています。一つの型で作る瓦の数は千点を超えることも。その過程で型は劣化が進みます。傷が生じたり、文様を彫り直したり、修復することもあります。2つをじっくり比較すると、同じ部分や異なる部分が次第にみえてきませんか？

これまで、瓦の記録は、写真や実測図、拓本という方法でおこなわれてきましたが、近年、デジタルカメラ等で撮影した写真から3次元の形を再現する技術が普及してきたため、出土遺物の記録にも応用しはじめたところです。一つの瓦を中央で分けて表示しましたが、右は写真から得られた色情報を貼り付けたもの、左は凹凸情報だけを示したものです。色を取り除くことによって、微細な痕跡も明瞭に観察できるようになります。

この3次元データは、遺物の状態を記録するだけでなく、今後は研究や展示等に積極的に利用していく予定です。
(埋蔵文化財センター 中村 亜希子/都城発掘調査部 今井 晃樹)

文様彫り直し前



凹凸情報のみ

凹凸情報と色情報



写真の撮影



パソコンでの解析

文様影り直し後



凹凸情報のみ

凹凸情報と色情報
(どちらも原寸大)

史跡等を活かした地域づくり・観光振興

遺跡整備研究室では、遺跡整備に携わる行政担当者・研究者等を対象として、2017年12月22日に「遺跡整備・活用研究会」を開催し、71名の参加者を得ました。

近年、地域づくりや観光振興において、文化財を活用することが当たり前のこととなってきました。国全体の動きとしても、歴史文化基本構想の策定や、日本遺産の認定等、文化財の総合的な活用に関する施策がますます推進されてきています。さらに、文化財の活用における弾力的な制度運用を目的に、文化財保護法の改正に向けた検討も現在進行中です。

文化財の保存活用の実務を担う、地方公共団体の中には、文化財をまちづくり等に積極的に活用するため、文化財担当部局を教育委員会から首長部局に移し、都市計画・観光部局との円滑な連携をはかったところもあります。いっぽう、小規模な地方公共団体では文化財担当者が少なく、積極的な取組をおこなうのは困難な状況も見受けられます。

以上をふまえ、研究会では「史跡等を活かした地域づくり・観光振興」をテーマに、今年度から文化庁に設けられた地域創生本部の研究官である村上裕道氏に、基調講演として、文化庁の施策のこれらについてお話いただくとともに、5つの地方公共団体の文化財担当者から事例報告をいただき、文化財担当部局の組織や職務のあり方について、議論・情報共有をおこないました。

文化財の「活用」は、「保存」と対立するものではなく、人々の文化財に対する理解・愛着を深め「保護」に資するものとして、実施されていかねばなりません。今後も遺跡整備研究室では、遺跡の適切な保存活用のあり方について、調査研究を進めていきます。

(文化遺産部 高橋 知奈津)



総合討議の様子

古代瓦研究会シンポジウムの開催

都城発掘調査部・考古第三研究室では藤原京および平城京から出土する瓦の調査研究を主な業務としています。その一環として、古代の瓦を全国的な視野で検討することを目的として、1997年度より古代瓦研究会を主催しています。

この研究会では、古代における特徴的な瓦の型式をテーマとし（「藤原宮式」や「東大寺式」等）、その瓦が全国的にどのような展開を遂げているのか、各地域の研究者の方々にご発表いただき、総合的な議論をおこなっています。

この研究会の大きな特徴は、瓦の製作技法に注目した検討をおこなうため、毎回各地域の関連する瓦を会場に展示し、参加者に瓦を実際に手に取って観察していただいた上で、それをもとに議論・検討をおこなう点です。この企画は、各地域の瓦を一堂に会して比較検討できるため、毎回好評をいただいています。

今年度は18回目にあたり、2018年2月3・4日の2日間、「一本づくり・一枚づくりの展開1」というテーマで開催しました。これは、奈良時代を中心とする軒丸瓦・軒平瓦・平瓦の特徴的な製作技法に着目し、東日本におけるその技法の展開について検討したものです（来年度は西日本での展開を取り扱います）。従来、研究会の開催にあわせて発表要旨集を刊行していましたが、今回は旧国単位での状況を理解しやすくするために、174頁にわたる資料集も併せて作成しました。

今回は2日間で延べ247名にご参加いただき、極めて活発な議論がおこなわれ、盛会となりました。

(都城発掘調査部 林 正憲)



実物資料の見学の様子

奈文研の日越文化財協力事業

ベトナム政府は、かねてから日本の協力を得て中部クアンナム省ホイアン市、トゥアティエン・フエ省フォックティック村、北部ハノイ市ドゥオンラム村において集落保存をおこない、日本の伝統的建造物群保存地区を下敷きとした文化財の保存と活用の両立をはかる制度を運用し、ホイアンは世界遺産になる等実績をあげています。奈良文化財研究所は日本政府のおこなう日越文化財協力事業の一翼を担い、これまで国内で培った伝建保存対策調査のスキルを生かしてベトナムで集落調査をおこなってきました。

ティエンザン省カイパー県はベトナム南部のメコンデルタに位置し、メコン川支流に面する中心部は物資の集散地として栄えました。今回ベトナムの国家文化財となったドンホアヒエップ村はカイパー市街地北郊にあり、水利を活かし、開拓期の19世紀には稲作、近年では果樹栽培をおこなっている村です。メコン川の支流同士をつなぐ運河沿いの敷地に洋風の外観の混じる伝統的な住宅の主屋が建ち、背後に果樹園が広がる緑豊かな農村景観は多くの旅行者を魅了しています。

今回の国家文化財指定は、奈文研が2011年から2013年にかけて実施した調査にもとづいておこなわれています。12月1・2日には外務省在ホーチミン領事や国際交流基金ハノイセンター長の出席のもと指定記念式典が現地でおこなわれ、その一環として国内や日本の保存地区関係者を招いてのシンポジウム、伝統的民家における茶道、華道、書道、日本料理等の実演がおこなわれました。

ベトナムの事例は文化財を通じた国際協力の成功例として自負できるもので、今後も、その保存と活用等に積極的に協力していきたいと考えています。

(文化遺産部 林良彦)



主屋と副屋が並ぶ伝統的家屋

日韓発掘交流に参加して

奈良文化財研究所では、2006年より大韓民国国立文化財研究所との発掘交流を実施しています。これは両研究所の共同研究の一環で、双方の研究職員が互いの研究所に約2ヵ月間滞在し、実際の調査に参加するというものです。本年度は私が奈文研からの交流員として、2017年10月23日から12月15日まで、国立慶州文化財研究所に滞在しました。

今回の滞在期間中、私は新羅の王宮遺跡である月城の発掘調査に携わりました。国立慶州文化財研究所では、月城の発掘調査を継続的に進めています。西側城壁のあるA地区、宮殿の中心部であるC地区、外部の濠状遺構の吹き地区の3ヵ所の調査区のうち、私はC地区の発掘現場に参加しました。

実際の発掘調査では、日本で目にするものとは異なる遺構・遺物の数々に感動と驚きを感じる毎日でした。また、調査の進め方や遺構・遺物の解釈等多岐にわたり、韓国の担当者と片言の韓国語や英語、日本語とともに、スマートフォンの翻訳アプリ等も用いて議論をしながら発掘調査を進めました。ときには資料を作成し、多くの関係者と打ち合わせをする機会もありました。調査の方法や習慣のちがいがなど、戸惑うことも少なからずありましたが、韓国の研究者とともにたくさんの成果を共有できたことは大きな収穫でした。

今回の滞在で様々な成果が得られたのは、両研究所が10年以上にわたって築いてきた信頼関係があってこそ、と確信しています。今後も一所員として共同研究に携わりたいと思います。

(都城発掘調査部 丹羽 崇史)



月城での発掘調査の様子

飛鳥資料館 春期特別展 「あすかの原風景」

飛鳥時代の遺跡と農村の暮らしが一体となった明日香村には、「日本の原風景」とも言われる眺めが広がっています。この歴史的風土を守るため、人々が立ち上がってから、ほぼ半世紀が経ちました。この間、村内では懐かしい農村風景が保たれながらも、集落の人口構成の変化や道路の開通、発掘調査の進展や遺跡の整備等により、少しずつ景色がうつりかわっています。

江戸時代から近代にかけての飛鳥では、古代の石造物や古墳の高まり等が歴史家の注目を集めるいっぽう、飛鳥の小盆地とその周辺には、当時の日本ではあたり前の農村の景色が広がっていました。近代の地図や、昭和期の発掘調査時に撮影された写真等からは、飛鳥ブームが巻き起こる以前の「あすか」の原風景がうかがえます。

今回の展覧会では、これらの地図や古写真等の貴重な資料をもとに、明治期から昭和中期にかけての飛鳥の集落の様子を紹介いたします。この展覧会が、かつての村の姿をふりかえり、未来に伝えていく契機となれば幸いです。

(飛鳥資料館 西田 紀子)



飛鳥寺発掘時の飛鳥集落（昭和31年）

会 期：4月27日（金）～7月1日（日）月曜休館（祝日の場合は翌平日） ※4月30日、5月1日は開館

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）

ウォークイベント：5月11日（金） 11:00～15:30（予定）古写真・古地図と歩く飛鳥（事前申込制）

ギャラリートーク：5月1日（火）・6月2日（土）各日14:00～

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問い合わせ：☎0744-54-3561（飛鳥資料館）

平城宮跡資料館 展示リニューアル

2018年1月4日より、平城宮跡資料館は館の一部をリニューアルしました。大きな変更点として、研究室コーナーにおける、研究室ごとの黒板の設置があります。

奈良文化財研究所では、日々発掘調査をおこない、日進月歩で新たな研究成果が蓄積されています。これら研究所ならではの調査研究や、そこから得られた新たな知見を黒板コーナーにて随時更新し、紹介する試みです。

初回となる今回は、木器の研究室：百万塔、土器の研究室：奈良三彩、瓦の研究室：瓦の三次元計測を取り上げます。また、研究室コーナーの一角に新たに奈良研トビックスというコーナーを設けました。ここでは、奈良研における様々なフィールドでの最新の研究成果を取り上げます。今回は年代学研究室による薬師寺東塔を対象とした、年輪年代分析について紹介いたします。奈良研がおこなう、様々な研究分野における日々の挑戦や研究の進展をお伝えできれば幸いです。

(企画調整部 座鞠 えみ)

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）

休館日：月曜日（祝日の場合は翌平日）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問い合わせ：☎0742-30-6753（連携推進課）



新しい研究室コーナー

■ お知らせ

第16回 平城宮跡 県民クリーン大会

4月7日（土）朱雀門前 9:30集合（申込不要）

※雨天の場合は4月14日（土）に実施します。

■ 記録

文化財担当者研修（専門研修）

- 報告書デジタル作成課程
2017年12月14日～12月21日 15名
- 名勝保存活用基礎課程
2018年1月15日～1月19日 11名
- 保存科学Ⅲ（応急処置）課程
2018年2月13日～2月16日 15名

平城宮跡資料館 新春ミニ展示

1月4日（木）～1月28日（日） 5,220名

「平城京の戊」

飛鳥資料館 冬期企画展

1月26日（金）～3月18日（日） 2,956名

「飛鳥の考古学2017」

現地説明会等

- 平城第593次調査（平城宮東院地区）
2017年12月23日（土） 823名
- 飛鳥藤原第195次調査（大極殿院回廊東北隅）
2018年3月3日（土） 645名

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2018年3月